

共感を取り戻そうとした保育実践の考察

——音楽遊びにおける軽度の障害のあるE児の事例をととして——

和田 幸子

1. 問題意識と目的：保育における子ども理解

幼い子ども達との保育の日々は喜怒哀楽に満ちている。体の動き、発せられる声によって、瞬時毎に変化していく状況の中で、子どもは感受し、さらに表現をしていく。子どもは幼いながらも精一杯の思考をめぐらせ、彼自身の願い、志向を果たそうとしていく存在であるからである。保育者も子どもと共感したいと願いつつ表現をしていく。それは子どもの育ちに向かう変容を具体的にイメージしながら行う保育行為となる。このように子どもと保育者が生命的なやりとりを重ねていく中で子どもは育っていく。

保育者は、保育現場のその時々状況の中で、目の前のこの子がどんな子どもであるのか、どんなことに喜びを感じ、どのように表現していくのかをよく見ようとする。幼いながらも、子どもの「生き方」があり、それを理解しようと努めるのである。ここには保育者の、子どもを理解しようとする構えがある。一方保育者も保育に臨む当事者自身としての考えを持つ。そこで子どもが願っていることと保育者の願いの刷り合わせが起こる。この時保育者は自らの考えへの問い直しを行う必要に迫られる。

それはO.F. ボルノーが、理解はどんなことがあってもその子を正当に評価しようとする意志を前提としていると述べたことと関わりが深い⁽¹⁾。複数の子どもと保育者との関わりの中で保育現場の状況は刻々と変わっていく。筆者の問題意識は、保育者が保育現場のどのような状況のもとでも子どもを正当に評価することができるのか、ということである。

保育の現場において保育者は、自分の常識の枠に入りきらない子どもの言動に出会うこともある。障害ゆえにか、人との関係がとりにくくこじれてしまっているケースに出会うこともある。

本稿で取り上げる男児Eもそのような事例であり、筆者らはEと共感して

いきたいと試みた。この保育実践を振り返り考察していきたい。

堀智晴は、保育実践を見直す視点として、①子ども理解 ②子どもへの願い
③手だて⁽²⁾、を挙げた。保育者は保育実践を行いながら自らの「子ども理解」を
問い直していく。しかし保育者の「子ども理解」は子どもを理解すること自体
が目的なのではないと筆者は考える。保育行為に向けたものだと考える。保育
者の「子ども理解」のまなざしは、保育の当事者として子どもをより良い育ち
に向けようとするものであり、保育という営みの中で共に育ち合うためのもの
なのである。それは O. F. ボルノーが、共同で何かあることを遂行する場合、
協力し合っていることの中で相手が理解され⁽³⁾るとし、それは「意味」において
互いに出会うと述べたこととも重なる。そこで保育者はこのような「子ども理
解」に基づき具体的な「子どもへの願い」を抱く。そのための保育の「手だ
て」を具体的に考え試みる。そうして再び子ども理解を問い直し、保育実践を
続けていく。

保育の場で共に過ごす子ども達と保育者は、関わりの営みを重ねていく。そ
こで共に育ち合うことの意味を「一人ひとりの子ども」と「みんな一緒に」の
双方に焦点を当てて追求していきたい。こうして子どもと直接に触れて、そ
こでわかったことをさらなる保育実践の根拠としていきたい。保育の現場に身を
浸らせ、そこで経験した出来事を記述し、そして省察をすることによって保育
実践研究を深めていきたい。

本稿では筆者が勤務した障害児デイサービスでの週1回1時間の設定音楽遊
びに参加した4才のE児の事例を振り返り、子ども理解の本質と本実践の意
義を考察することを目的とする。

2. 方 法

当障害児デイサービスにおける、設定音楽遊びの場面から、男児Eの姿に
ついて実践記録をもとに検討する。Eが参加した200X年10月から翌年6月
にかけての34回のセッションを対象とする。

〈設定音楽遊び〉

当障害児デイサービスの幼児（障害のある子）と近隣地域の子ども達が母親
と共に参加している。平均参加は11家族。週1回1時間行っている（表1）。
主な内容は、朝の歌・季節の歌、楽器遊び、呼びかけ、わらべうたによる親子
ふれあい遊び、わらべうたによる体を動かす遊び、音の有無で走る・止まる、

手具を使った遊び、体を動かす遊び、皆で一体感を感じるような遊び、わらべうたによるミニシアターである（表2）。筆者はこれらの遊びをリードしながらすすめている。筆者を含む保育者3人と看護師1人が参加している。

（表1）

期間・頻度・時間	場 所	集 団
200X 年10月 ～200X + 1 年 3 月	当障害児デイサービス 2 F ホール	1. 2. 3 才児 ^{注1)} と親 平均11家族 保育者 3 (筆者含む) 看護師 1
200X + 1 年 4 月 ～200X 年 + 1 年 6 月	当障害児デイサービス 1 F ホール	
週 1 回 1 時間		

（表2）

〈朝の歌・季節の歌を歌いながら始まる・楽器遊び〉 ↓ 〈呼びかけ〉 ↓ 〈わらべうたによる親子ふれあい遊び〉 ↓ 〈わらべうたによる体を動かす遊び：大人にしてもらう遊び〉 ↓ 〈音の有無で走る・止まる〉 ↓ 〈手具を使った遊び〉 ↓ 〈体を動かす遊び〉 ↓ 〈皆で一体感を感じるような遊び〉 ↓ 〈わらべうたによるミニシアター〉 ↓ 〈ミニシアターの人形を見送って終える〉

〈手具を使うことについて〉

筆者は幼い子どもとの音楽遊びの実践に際し、手具を用いることを試みてきた。リボン、紙テープ、布、綿、木の実などの手具である。なぜなら音楽の流れを感じながら、様々な感覚、つまり多感覚を働かせてほしいと願うからである。手具を目にした時、その形や色に魅かれ触ってみたいと思って手を伸ばす。そのような心と身体の動きは子どもの内から生じるものである。この時音楽と共に子どもの表現が引き出されていくことを願うのである。音楽に合わせて、また歌いながら手に持った布を振ると、何も手にしていないときよりも腕の振りが大きくなる。布がなびく様子を見ることでさらに大きく振る意欲が増し、布からの風を感じたり、布を持つ手が空気の抵抗を感じる。また両掌で布を包み込む時には手指をこまめに動かす。つまり、音楽は、聴覚のみでなく、視覚、触覚でも感じ、空気の流れ、温度と共に感じられるものだからである。さらに音楽活動は体の動きや発声、言葉を伴う。音楽を多感覚に感受し表現してほしい。このような願いに向けての手だてとして、筆者は手具を用いてきた。本事例では、手具がE児の表現を引き出し成長を支えるものになったのかどうか、考察をする必要がある。

〈E児について〉

Eの母親によると、妹を妊娠中、つまりEが1才の時から多動で、それに付き合う身重の母は正常な妊娠状態を保つのが難しいほどであった。妹を出産後、母親は幼いきょうだい2人の育児に追われていた。Eと妹が落ち着きなく行動するので、度々父親に厳しく叱られていると言う。Eは父親に叱られると家を出ていくようになり、母親はEを追い、Eを守ることに努めた。

Eと妹は保育所に通所している。しかしEと妹が次々とトラブルを起こし、保育所側も対応に困っていた。地域の巡回相談員が母親と相談をして、状況の改善を図ろうとしていた。Eが広汎性発達障害で、軽度の知的発達遅滞があると診断されたことをきっかけとして母親は「障害児のための配慮を受けられる場」として、当障害児デイサービスを保育所と並行利用することを希望した。

3. 経 過

Eの参加の様子と保育者の関わりを、3期に分けて記述しそれぞれに考察していく。＃はセッション回を表す。

I 期（#1-3）200X 年9/26-10/10：母親と参加する

1 (9/26)：初めての場で E も不安なのか、母親にしがみつき、母親も E を抱っこしていた。

2 (10/3)：座った姿勢で母親に抱っこしてもらっていた。筆者がわらべうた音階で「E くーん」と呼びかけても動かなかった。筆者のリードで皆がプレイクロス（65cm四方の半透明のオーガンジー生地）を頭にかぶせくずくぼんじょと歌いながら遊び始めた。すると E は、母親にしがみつくその手を少しゆるめ、右手は母親の腰を持ちながら、左手を伸ばしてプレイクロスを一枚取った。それを広げて自分の足に掛け、もう一枚取っては掛ける、ということを繰り返した。腰から足元にかけてすっぽりと数枚のプレイクロスで覆ってしまった。その状態で母親の元に留まっていた。筆者らがくいちきらいらいと歌いながらボールを上に向けて遊び始めると、E は母の元から離れボールを取りにいき、足早に廊下に出て吹き抜けのところから1階に投げて落とした。

3 (10/10)：母親に抱っこしてもらうスタイルで始まった。わらべうた音階で一人ずつ呼びかけると、呼ばれた子は返事をしたり手を挙げたり、じっと筆者を見つめるなど、何らかの応答してくれる。E は母親の胸に顔をうずめて首を横に振った。その後も母親に抱っこをしてもらった状態で、母親には立って走ってほしいとか、イスに座ってほしいと指図した。母親は E を抱いて言われるがままに動いていた。

セッションの後半になろうとしていたとき、母親は E を置いて帰宅することになった。E は大声で泣いた。I 保育者が E を抱いて1階へ行き一回りするうちに落ち着き、再び2階ホールに戻った。

I 期の考察

当設定音楽遊びは、原則的には母子参加である。しかし育児に悩み疲れた末、当障害児デイサービスの利用を始めた場合、母親がしばらくの休息を求め、その後参加するようになるケースもある。E の母親ももともと母子参加する意思はなかった。それはこれまでに E が母親を離れて保育所で過ごしていたことから、E を単独参加をさせることへの不安が薄かったことにもよる。E はまるで保育者らの視線を避けるように母親に顔をうずめ抱きつき、母親が帰宅することを許さなかった。そこで母親はやむなくこの場に居たのだった。E は活発な動きをし、話す言葉もはっきりと聞き取れ、この集団内で最も年齢の大きな子どもである。しかし、母親にべったりと抱きつくその姿は、最も幼い子ども

のように見えた。これまでEと妹がそれぞれに動き回るので、母親も対応に追われていた日々だったと察せられる。次々とトラブルを起こしては大人に叱られることを繰り返していたのだった。いわば負の循環に陥っていたと考えられる。そのような中で母親に甘えることは少なくなっていただろうと推察される。この場でEが母親に密着する姿からは、最も幼い時期の母子間の密着経験をしなおしているように感じられた。

そんなEであったが、母親の体にくっつきながらも次第にブレイクロスに手を伸ばした。それはEが抱っこしてもらった状態で皆の遊びを見て、少しずつ興味を向けていったことであった。それは表現の始まりであり、少しずつ広がっていくことを筆者は願った。一方、ブレイクロスを自分の足に掛け続け、すきまなく覆ってしまうまで続けたことが気になった。つまりEがしたことは皆と同じようにブレイクロスで遊ぶのではなく、自分の足を覆うということだった。何かに「包んでもらう」という状態にしたのである。肌を密着させ包んでもらう状態にしたいという、この願望はどこから来ているのか、と筆者は考えさせられることになった。この問いかけは、その後のEの姿からも続くこととなる。

また、母親にしがみつくようにしていたEが母親から離れたのは、ボールを持って廊下に出て、吹き抜けから1階へボールを落とすという時だった。このボールを捨てるような行為は何を意味するのだろうか。

Eの母親にとっては母子参加を3回経験したわけであるが、それは望んだことではなく、Eが帰してくれなかったから居ただけのことであった。Eの抱きつきは、このときだけは母親の気持ちをEのみに向けてほしいという必死な願いのあらわれではないだろうか。それゆえ、Eは母親に抱っこしてもらって、あたかも母親を支配するような言動をしたのではないだろうか。母親が離れていってしまわないように、Eなりに懸命に願ってした行為だったのだろう。

このような状態にあるEと母親に対して、筆者らは接点を持ちたいと願った。しかしEと母親の2人が周りに対してまるで閉じた状態で、関わりを持つことはなかなか難しいと感じた。そんな時、セッション途中に母親が帰宅することになった。その詳しい事情は分からない。母親自身がEに縛られていること、その姿を保育者や他児、母親達にさらしていることに耐えられなかったのかもしれない。結果的に母親は帰り、Eは母親に見捨てられたような形になった。

I期においてEは母親とセッションに参加をした。しかしEに密着を求め

られ、母親は気詰まりを感じざるを得なかった。そのような母子に筆者ら保育者は関わるすべが見出せないでいた。他児達と歌い遊びながら、楽しさをEにも感じてほしいと願っていた。つまり、Eが母親や他者と共感する経験をしてほしいと願いながら、模索をしていた時期だったといえる。

Ⅱ期：単独参加になる（#4-26）200X年10/17-200X+1年4/16

#4以降、母親の希望によりEは単独参加になった。そこで保育者らはEに配慮して関わりたいと臨んだ。Eが筆者の動きの模倣をする場面が見られ、楽しんで参加するようになるかと期待した。しかし、なかなか共感しにくい状態が続いた。Eの参加の様子で気になることが生じてきた。それはEが吹き抜けから手具、小道具、楽器等を落とすこと、手具を体に巻きつけたり手具を集めること、大人との関係の持ち方であった。その様子を記す。

【動きの模倣を楽しむ：200X年10/24, 10/31】

#5 (10/24)：セッションの始めにわらべうたで手遊びをしていた時のことである。筆者は〈だいこんつけ〉と歌いながらそのリズムで、前に出した両掌を上下に軽く揺らす遊びをはじめた。徐々に同じように真似をする子どもが増え、皆で一つのリズムを共感する場になりつつあった。その中に座っていたEも筆者の動きを見ながら同じように両手を前に出して上下させていた。それを見たS保育者が「Eくん上手にしてるやん」と声を掛けた。するとEは両手を上下に揺らすのをやめ、大マットの所へ走っていき跳び込み寝転がった。

#6 (10/31)：〈だいこんつけ〉と歌う筆者を見ながら、Eは両手を前に出して上下に揺らしていた。筆者、保育者達はEに特に声をかけないでいると、Eもそのまま両手を上下に揺らし続けた。

Ⅱ期の考察①【動きの模倣についての考察】

朝母親と共に来所するものの、母親は帰宅し、E単独での設定音楽遊びへの参加となった。玄関で「バイバイ」と母親を見送ったEは、他の子どもと母親達が一緒に参加している中に居ることになった。筆者ら保育者は、これまでも具体的な関わりをもてないでいたEを単独参加児として迎えた。Eといかにして接点を持っていくか、手探りで始めることになった。

Eは、〈だいこんつけ〉のわらべうたに合わせて手でリズムを取っていた。しかし保育者に注目されているということに気づいた途端、続けてするのを辞

めてホールの端に行ってしまった。他者の視線をどのように受け止めたらいいのか分からなくなったのであろう。

青木久子が言うように、子どもは他者に「見てもらう」ことによって自分の存在を確かめていく。⁽⁵⁾ また西村清和は、そのまなざしは、お互いに笑いかけあい同調している、いわばキャッチボールであるとし、その同調に身をゆだねるとき、遊びが成立すると述べる。⁽⁶⁾

わらべうたでの手遊びはまさにそのようなひとときを楽しむものであろう。しかし、他者のまなざしに自分がさらされていると感じるとき、すなわち他者から一方的に見られていると感じるとき、Eは身を固くするしかなく、遊びではなくなり、その場から離れるしか方法がなかったのだと考えられる。具体的には、筆者が歌いながら身体の動作で〈だいこんつけ〉のリズムを表していた。そして多くの子どもも同じように身体を動かしていた。そこにいたEも、同じように揺らした。Eの他者を見るまなざし、そして他者がEを見るまなざしの、どちらもがさりげないものだった。そしてEはそのまなざしに身をゆだねるようになっていたと言えるだろう。このことは「まなざしに同調している」と言いかえてもいい。

しかし、S保育者の「Eくん上手にしてるやん」という言葉がけにより、その同調のバランスが崩れ、まなざしに身をゆだねることができなくなったのだろう。見られているという現実直面してしまったのである。S保育者は悪気があったのではなく、むしろEの姿に喜んでかけた言葉だったろう。しかし障害のためにであろうか、また幼い頃から厳しく叱りつけられることが続いたからであろうか、Eは他者のまなざしから逃れるという身の処し方を身につけてきたのではないかと考えるのである。「まなざしの同調に身をゆだねる」ことを相互に喜び合えるような経験をつくりだすことが筆者らには求められるのである。

[吹き抜けから手具、小道具、楽器等を落とす：200X年10/17,10/24,10/31,11/7,11/14]

単独参加となつてからのEは、皆の輪の中に居ず、ホールの端においてあるソファや大マットの上に寝転がり、皆が遊ぶ様子を見ていることが多かった。そして、その姿勢から急に立ち、手具、小道具、楽器を取り、そして廊下の吹き抜けから1階へ落とすことが度々あった。

＃4 (10/17)：筆者がわらべうた〈いちりきらい〉と歌いながらボールを

上にポイと投げ上げては受けるという遊びを始めた。子ども達は「ほい～」と言いながら懸命に投げ上げて楽しんでいた。そこに E は突進ってきてボールを一つ取り、さっと廊下に出て吹き抜けから下に落とした。

筆者はそのような E の行為をホールから見ながらも大きな竹製のレールを出し、その上にボールを転がす遊びを〈おーらい〉と歌いながら進めていった。すると E は廊下からホールに戻ってきた。そして次々とボールを竹のレールにのせ、転がっていくのを「わーい」と声をあげて見た。

5 (10/24) : E はカラー積み木（一辺が22cmの立方体）を吹き抜けから1階へ落とした。筆者は E の側に行き「やめとき（やめてちょうだい、の意味）」と言い、E と手をつないでホールに連れ戻した。カラー積み木を床に並べて置き、その上を歩いて渡っていく遊びを始めると、E はじっと他児の様子を見ていた。そして E もカラー積み木の上ののり渡っていった。筆者は〈どどんばしわたれ〉と歌い続けた。E は渡っては降りることを繰り返した。

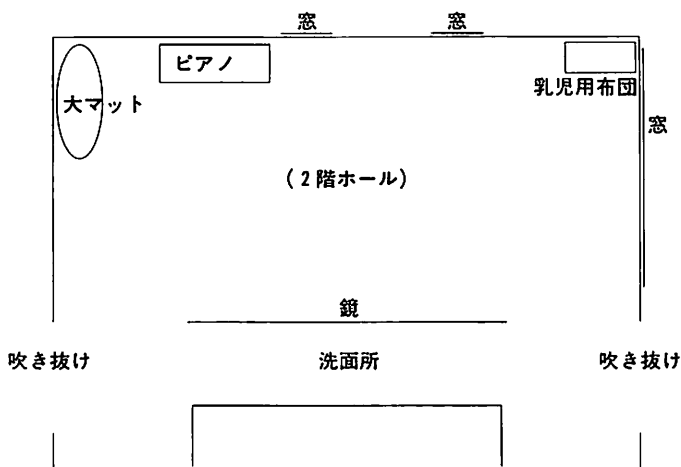
6 (10/31) : カラーフープを吹き抜けから落とそうとしていた。筆者は〈いもむしころころ〉と歌いながら廊下に出て、カラーフープを落とそうとしていた E に近づいた。筆者が手を差し出すと E は手をつないでくれたので一緒にホールに戻り、カラーフープをいくつも立てて連ねたトンネルの前へ行った。E は四つ這い姿勢でそのトンネルを2回くぐった。

7 (11/7) : 吹き抜けから落とすことはなかった。手具の綿ロープを窓のところに持っていき棧に沿わせ当てた。そして窓枠をじっと見入った後、横に見ながら勢いよく走っていった。他児とぶつかり危ない状況だった。

8 (11/14) : セッションの始まりに、E は楽器を手にして、吹き抜けから落とした(図1)。

II期の考察② [吹き抜けから落とすことについての考察]

E はホールの端に居て、その場から皆の様子を見ていた。珍しい手具などを目にする度、ホールの端から走ってきて、さっと手にするものの吹き抜けから落とすのだった。2階の吹き抜けから1階に落とすと、加速し落ちたときの衝撃も大きい。事故につながる危険性もある。そのような危機迫る行為を前にした保育者は、E に注意の声を発した。しかし長々と叱りつけることが E の行為を好転させることではないと理解している保育者は、さっと切り替えて E も皆の遊びへ引き込もうとした。E はそのような筆者の思いは受け入れたのである。ボール、カラー積み木の上を渡ること、フープのトンネルをくぐってい



(図1) 2階ホール見取り図

くことなど、Eは遊びへ興味を向け、筆者の思いを受け入れて、参加することはできたのである。

Eは他者に見られることへの抵抗、とりわけ評価されるようなまなざしへの抵抗を持ちながら、一方では自分だけを見てほしい、というアンビバレントな状態にいたと考えられる。その状態から脱して活動したいという気持ちも持っていたのだろう。だから、「落とす」という行為で自分の存在を保育者にアピールしたのだろう。保育者からの少しの叱責の後の、遊びへの誘いを期待していたのだと考える。

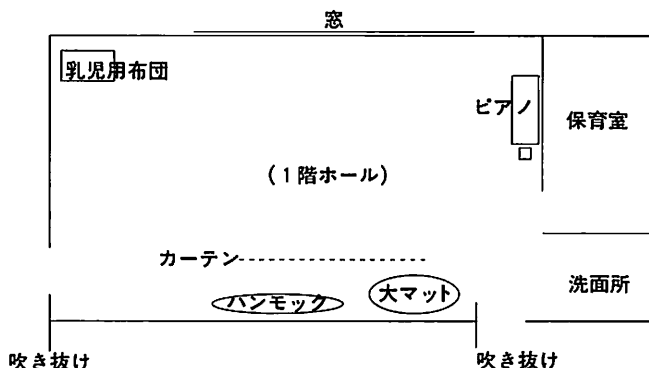
[巻きつける：200X年11/14,12/12,200X+1年1/23,1/30,2/13,4/30]

#8(11/14)：Eは乳児用の布団を体に巻きつけて、皆が遊んでいるところに来て寝転んだ。

#11(12/12)：プレイゴムというリトミック用の幅広ゴムを自分の体にぐるぐると巻きつけた。

200X+1年1月からは、園内の事情により設定音楽遊びを1階ホールで行うことになった。1階ホールにはハンモックや吊り輪のあるコーナーがあり、設定音楽遊びの間はカーテンで仕切られているが、子どもでも簡単に開けて行くことができる。Eは度々ハンモックの所にいき寝転ぶようになった。また、カーテンで体を巻きつけることも頻繁にあった。

#27(4/30)：乳児用の布団を頭からかぶり、その姿で皆の輪の中へ突進した。勢いもあり、他児達にとっては危ない状況だった(図2)。



(図2)・1階ホール見取り図

[手具を集める：200X年11/21,200X+1年1/9,4/30]

設定音楽遊びでは表現が自然に引き出されることを願って、色々な手具を使うを試みている。Eはホールの端に居ても、それらの手具に対して興味を向け、取りに来る。しかし、一つ、二つを手にするのではなく、大量に、時にはあるだけ全部を自分のものにしようとすることもあった。以下はそのような場面である。

#9(11/21)：Eは籠からプレイクロス30枚全部を取り出し自分の膝の上にかぶせて座った。保育者や他児達は、Eの膝の上からそっと1枚ずつもらい、プレイクロスを両手の中で丸めくりにぎりぱっちり」と歌い遊び始めた。その姿を見たEは、自分の膝の上から1枚取り、同じように握ってはゆるめてプレイクロスが広がるのを楽しんでいた。

#14(1/9)：Eは、プレイクロスを大量に取り、自分の腰まわりに置いた。筆者が他児達のために数枚そこから「ちょうだい」と取ると、Eは「あかん」と言って、たくさんのプレイクロスをホールの端へ持って行ってしまった。筆者や他児らはホールに残ったプレイクロスで「くずくぼんじょ」の遊びをした。その間、Eは端でプレイクロスを膝の上にのせていた。

II期の考察③ [巻きつけること・手具を集めることについての考察]

Eはホールの端の大マットやソファに座って皆の遊びを見て、興味を向けた時に入ってくる。Eにとって、プレイゴム、プレイクロス、といった小道具、

手具は、視覚的に、遊びの魅力を感じるものであったのだろう。それに魅かれて皆の遊びの場に来た。それはEが他者と関わりながら遊びを経験するきっかけとなる。実際に、そこで少しの間ではあるが手具の手触り、質感を楽しむことができた。

しかし、筆者は、Eが大量の手具を取り込み、それで腰から下を覆う姿が気になった。それは、ハンモックやカーテンで自らの体を巻きつけること、乳児用の布団を頭からかぶる姿とも重なって感じられることであった。これらの素材は布であり、肌に密着させて覆うのである。「包まれた状態」になろうとしているのである。

筆者はEのこの姿を見て、まるで胎児が母胎の羊水に包まれているような状態を、E自らがつくり出しているように思えた。胎児は母胎の中の環境に依存しながら成長している。中川香子⁽⁷⁾はこれを、生理的な関係であるとともにパトス的な関係である、と述べている。つまり、胎児は母胎内の環境を受け身的に受容するしかないのである。そしてその中で、母親とは違った存在として胎児独自の成長を遂げていくのである。パトス的でありながら、独自の歩みをいわば能動的に行っているのである。

Eは、包まれた状態、すなわちパトス的なものに依存しながら、E独自の歩みをしたいという願いを表しているのだろうか。これまでの育ちの中で、Eは身近な人への依存をしながらEの欲求を表現していくという、それら二つのバランスを保つことが難しい状況になっていたのだろう。それはEの障害を発端として、Eと関わるのがスムーズにいかなくなった父親、必死でEをかばおうとするものの感情的にはEを受け入れられない状態にある母親のもとで、Eが誰かに依存したい気持ちを受けとめてもらえていなかったことを意味する。そんな中で、E自身が能動的な育ちのエネルギーを発揮することが困難になってしまっているのかもしれない。そのようなEに対して、筆者ら保育者ができる支援とは何なのだろうか。保育者が、Eにとって依存できる存在になりうるのだろうか。その可能性を見出したいと願いながら関り続けるしかないと考えたのだった。

【大人との関係：200X+1年1/30】

Eはホールの端から手具を目指して突進して来て、少しの間持って参加し、再びホールの端へ戻った。またEがハンモックに包まれているときに、筆者がホールの中央で他児達とわらべうた遊びをしながら、〈おつぎはEくーん〉

と呼びかけると、とても嬉しそうな顔で出てきた。セッションの最後に筆者がオカリナを吹くと、Eは間近まで来て見上げてじっと聞いた。指人形を揺らしながら〈どっちどっち〉と歌うと、指人形をよく見て「ねこ」「パンダ」と呼びかけもする。Eは、筆者がこの設定音楽遊びをリードしていることを了解し、遊びへの期待も向けてくれるようになっていった。

一方、男性保育者や男性実習生に対しては、体当たりでぶつかっていった。座ったり四つ這い姿勢を取っている男性保育者らの背中に乗って思い切り叩いたり、思い切り引っばった。男性保育者らとのとっくみ合いの遊びはEが勝つまで続いた。

＃17(1/30)：この日は一人の女子学生の見学者がいた。ホールの端で立ってセッションを見ている見学者に対して、Eは保育室から持ち出した縄跳びで両足を縛る、はずしては両手を縛る、そして手を引いて2階へ連れて行く、という仕方ですれ回した。全く皆の遊びには参加しない様子だった。1階へ戻ってきたEに、筆者は「やめとき（やめよう、の意味）」と言った。すると、それをきっかけにEは見学者から離れ皆の遊びの中に入ってきた。

Ⅱ期の考察④ [大人との関係についての考察]

Eは筆者に対しては、まるでかくれんぼを楽しむかのように、ハンモックから顔を出しては自分の存在をちらちらと知らせた。筆者も歌いかけながら、Eを見つけた、というメッセージをEに送ったのである。ここにはゆるやかな発信とゆるやかな応答の往還の芽生えがあった。

多くの子どもの場合、このような往還を楽しみながら、徐々に皆の遊びのところへ行こうという気持ちになっていく。しかし、Eの場合は手応えを感じるような変化にはならず、筆者はいかに関わればいいのかと模索していたと言える。

そんな時、男性保育者や男性実習生は、Eと体当たりで、いわばはっきりとした形で関わった。ここにはEからの強い発信とそれに対する男性保育者らからの強い応答があった。Eが力いっぱい男性保育者らに向かう限りは、男性保育者はEに力づくで応答する。Eが男性保育者に気持ちをそらすことなく向けてもらうには、力いっぱいに向かっていき続けるしかないのである。Eが際限なく男性保育者らに力をぶつけたのはそのためと考えられる。

では女子学生とEの間に起こっていたことは何だろうか。女子学生は、この場では「見学者」であり、セッション中に生じる事柄を受け身的に捉えていたと言える。筆者や保育者は子ども達、また個々の子どもに対して願いを持ち、瞬時毎に対応していく。また母親は、自分の子どもからの表現を受け止め、そ

して応えていく。それに対して、見学者は積極的な関わりをすることはなく、ただそこで生じる事柄、個々の子どもの行為を否定することなく受け止める。Eは女子学生がそのような立場であることを察し、どこまでもEの言動を受け入れてくれるということを試したのだろう。Eが女子学生を支配的に操っていく姿は、E自身が支配的に操られている日常生活を象徴しているようで、痛ましかった。決してEもそのような行為を続けることで満足はしていなかったと考える。なぜなら、筆者が「やめとき」と言ったその一言で、Eは女子学生のもとを離れ皆の遊びのところに來たから、Eなりに区切りをつけたいと思っていたのではないかと考えるのである。

このように区切りをつけることを助けるような援助が必要な場合がある。皆との遊びを続けながらも、Eの思いを理解しようと努め、タイミングを捉えた援助をしたいと願うものである。

[相談員との懇談：200X+1年3月]

筆者は地域の相談員から、Eと母親について相談を受けた。以下はその内容である。

相談員は保育所でEの母親と懇談した。それによると、家でEが乱暴な行為をするので、近所からの苦情が相次ぎ、父親が厳しくEを叱りつける。そのような状態が続くので母親は気が休まるときがなく、やむを得ずEを休日保育にも預けていると言う。

母親のしんどさをケアする必要はある。しかし、Eの思いを受け止め、子どもとしての生活を守ってあげることももっと大事。母親がEに向き合っていないので、Eが母親の気を引くために物を投げる、家から出て行くといった行動が固定化してしまっている。母親がEを受け入れ付き合うには、年齢的に今が最後のチャンスだろうから、当障害児デイサービスの設定音楽遊びに母子参加してもらってはどうか。この設定音楽遊びの場が、そのことを果たせる最後の砦になると思う。

Ⅱ期において筆者ら保育者は、単独参加となったEと接点を持ちたいと模索した。素朴な歌遊びをする中で、Eが保育者の身体の動きに目をむけ、E自身も同じようにしてみるという動きの模倣がみられた。また手具に興味を向け手にして、その手触りを楽しんだ。しかし、Eはその手具で身を包むことを繰り返した。一方、自分の存在を保育者にアピールし、他者に支配的に関わることがあった。他者と相互に楽しみ合う経験にはなかなか至らなかった。

相談員は、まなざしを交わしながら同調して遊ぶ、という意味において、乳児期の母子の密着経験を今取りもどしておく必要があるということを言いたかったのだと考えられる。筆者もそのように考えていた。そこで、相談員とEの母親が、以下のように出会い、相談員から伝えてもらうことにした。

#26(4/23)：相談員は母親と設定音楽遊びと一緒に参加してもらった。そして相談員は母親に、設定音楽遊びに母子で参加することを勧めた。母親はその言葉を受け止め、この後毎週、年中児になったEと母子参加することになった。

III期：再び母親が参加する（#27-35）200X+1年4/23-6/25

〔再び母親が参加する〕

Eは母親にべったりとしがみつки、抱っこスタイルで、セッションのはじめから皆の集まる輪の中に居ようになった。Eは抱っこしてもらった状態で、手具を足元に集めることが続いた。そのような場面を記す。

#27(4/30)：〈たんぽたんぽ〉のわらべうたを歌い、掌にのせた綿を吹く遊びをしていた。Eは母親が吹くように、Eも吹き飛ばそうと試みていたのだが、うまく飛ばなかった。だんだんに手にする綿の量が多くなっていき、箱に残っていた綿を全部取って膝の上に置いた。

#28(5/7)：綿の入った箱ごと抱え、母親の膝の上に座り、大量の綿を自分の足にのせた。

#31(5/28)：プレイクロスを大量に足の上にのせ、そのクロスを口につけてなめたり噛んでいた。それを見たY看護師がやめるように注意すると、Eは怒ってY看護師に唾を吹きかけた。

#32(6/4)：リトミックで使う紙テープを大量に自分の腰まわりに置いた。その後それらを両手で大マットまで持って行ってしまった。筆者が「もってきてね」と声をかけるとEは手ぶらで戻ってきた。紙テープは大マットの所に散らばったままだった。母親はEに「かたづけ!」と叱ったがEは知らんぷりをしていた。筆者は次の遊びをしようと〈まるくなーれ〉と歌いながら跳び、近くの子らと手を繋いでいった。その間Y看護師がEに、紙テープを袋に入れよう、と誘いかけ、一緒に入れた。入れ終わると、Eは大急ぎで皆の遊びの輪に入ってきた。

母子で少し遊べた場面もあった。

#30(5/21)：セッションのはじまりに、母親は歌いながら、膝にのっているE

のお腹や胸を両手でさすっていった。Eの母親が歌っている姿を見たのは初めてだった。いつものようにEが母親にべったりと密着するのではなく、ほどよくふれあって歌遊びをしていた。Eはやさしい表情で笑っていた。

大人の足の甲の上に、子どもが足をのせ〈あしあしあひる〉と歌って前進していく遊びを始めた時だった。Eは立った母親に抱っこしてもらったままで見えていた。母親はEを抱いたまま、皆の列に混じり歩いて進んだ。皆が歌う〈あしあしあひる〉のそのリズムで進んでいくことを繰り返したのだった。

#32(6/4)：立った母親にEは抱っこしてもらっていた。筆者は母親から代わってEを抱っこした。そして筆者の足の甲にEの足をのせようと試みた。しかし、Eは体を反らし、両手をマットの上につけた。そこですぐに筆者はEの両膝を持ち、くっと前に押していった。Eはマットにつけた手で交互に這って前進した。筆者が歌う〈たまげたこまげた〉に合わせてゆっくりと手をマットにつけて進んでいった。その後Eは母親の元へ行き、母親に両膝を持ってもらって手で前進することを楽しんだ。

#34(6/25)：Eは母親の足の甲の上にのり、母親も〈あしあしあひる〉と歌ってリズムをつくりながら進んでいった。

Ⅲ期の考察①〔再び母親が参加したことについての考察〕

母親が再び参加するようになり、Eは母親と身体を密着させて過ごすようになった。年中児のEをずっと抱いているのは、母親にとって体力的に楽なことではないだろう。Eよりも年齢の小さい子ども達が、親元を離れて遊び、また親元に戻ってくる、その様子を見て、Eの母親が平静な気持ちでなかったことは推測できる。Eが母親と一緒に遊ぶことを想像して、母子参加を始めたと思うからだ。

そんな母親の気持ちのもと、Eは手を伸ばして手具を大量に取り込んで、そのままにした。母親は片づけをするようにとEを叱ることになってしまった。筆者は、母親の焦る気持ちに歯止めをかけたいと願った。筆者は粛々とわらべうたを歌いながらそのことを願っていた。

そんな中で少しずつEと母親と一緒に遊べるようになっていった。母親が歌う姿も見られたのである。硬直した心身の状態からは、歌うことは生じてこない。息を身体に入れること、そして息を発しながら声にして歌うこと、その繰り返しは、体外から体内へ息を入れ、歌にして表現していく創造的な営みの循環であると考えられる。Eの行動に悩みながらも、母親がこの場に安心感を持つ

ようになってきたことが、このような母親の行動の変化を生じさせたと考える。この変化は、Eにも少なからず変化を与えるものとなった。それまでは母親とくっついていてもEの目は見開いていた。この時期には柔らかい顔つきで笑顔も見られるようになったのである。また、筆者がEを抱くことも嫌がらず、一緒にやってみようという気持ち、つまり保育者の願いに応じてみようという気持ちになっていった。そうして経験した遊びを母親としてみたいという気持ちになっていったのであった。

[こいのぼりを壊す：200X+1年5/7,5/14]

#28(5/7)：ピアノ横の小さな台の上には、季節ごとの飾りを置いている。この日は、折り紙で作った小さなこいのぼりの飾りをビンに入れて置いていた。子ども達はセッション中入れ替わり立ち代り、このこいのぼりのところに来て、じっと見たり指先で触ってみたりしていた。

セッションの最後に、筆者がペープサートをしようとしていた時だった。Eがこのこいのぼりを取り、ちぎってピアノの上に置いた。筆者はその時、やめて、と言いかけたが、Eがもう手にしていなかったことから、そのままにしてペープサートを始めた。Eは皆に混ざってペープサートを見た。しかし、終わったその瞬間に、再びこいのぼりを手にして、全部ちぎり、棒も折ってしまった。そして洗面所に走っていった。

一瞬の出来事で、筆者はどう解釈したらいいのかと混乱した。洗面所から走って戻ってきたEに「すごく困る」と伝えた。Eは手が濡れているので「タオル!」と言って逃げようとした。筆者は必死に、「とても困る、悲しい」と伝えた。それを見ていた母親は、Eに「ごめんなさいは!」と言って謝らせようとしていた。Eは母親に抱きついて泣いた。

#29(5/14)：筆者は、こいのぼりを作りなおし飾っておいた。セッションの間、Eはこいのぼりには特に注意を向けなかった。セッション後、Y看護師がEに「先週のこいのぼりこと覚えてる?」と聞いた。Eは「おぼえてる」と応えたという。Y看護師は続けて「和田先生、悲しかったと思うよ。一緒に謝りに行こうか。」とEに話した。そして一緒に筆者に「ごめんね」と言った。筆者は「悲しかったよ。作りかえて置いたから大事にしてね。」と応えた。それを見ていた母親は、筆者に「Eはこいのぼりが怖いみたいだ」と言った。

Ⅲ期の考察② [こいのぼりを壊したことについての考察]

この出来事は筆者にとって衝撃的なことだった。こいのぼりを一瞬のうちにとことん破って壊してしまうのはなぜなのだろうか。

セッションの間、子ども達はホール中央で遊びながら、そして時々こいのぼりのところにも行き、ながめては、側にいる母親と顔を見合わせる。そこには言葉はないが、一緒にこいのぼりを見て、かわいいね、と気持ちを交わす母子の姿がある。

Eはそんな母子の相互の関わり合いの姿を、羨ましいという気持ちを超えて、疎ましく見ていたのだろうか。筆者は、一瞬のうちにとことん破るまでしてしまうEに、そのような気持ちを読み取るのである。

母子参加になったことをEはどう受け止めているのだろうか。赤ちゃん返りともいえるほどの密着をして、そして少しずつ母親と遊ぶ経験もしつつあるEであるが、まだまだEにとって母親との強い絆を確信できないでいるのだろう。母親は懸命にEの要求を受け入れようとしていた。Eの抱きつきを拒まず、Eが指示するままに動いていた母親であったが、Eの要求に応える理由を母親なりに探し納得しようと努めていたと考えられる。

それは、Eの母親の「Eはこいのぼりが怖いみたいだ」との言葉からも考えさせられる。時々人形の目が怖いと言う子どもはあり、もしかしたらEもこいのぼりの目に怖さを感じていたのかもしれない。そういう意味では母親の言葉を筆者は理解できる。しかしそれはEに確かめたことではなく、母親の推測である。Eの行為には意味があると懸命に考える母親は、咄嗟に理由付けを考えるようになってきたのではないだろうか。しかしそこにはEの気持ちとのずれがあると考えられる。Y看護師と一緒に「ごめんね」と謝った、そのEの気持ちの変化を、母親は受け止められていないのである。「謝りに行ってえなかったね」とEに声をかけてあげてほしかったと思う。いや、筆者自身も「謝りに来てくれたね」と応えてあげられたらよかったのかもしれない。そうした時、こいのぼりを壊すという行為をしてしまったEの気持ちと母親の気持ち、筆者の気持ちとが繋がれ、Eが生きるための基盤になっていったのではないかと考えるのである。

[当障害児デイサービスの利用を中断する：200X+1年6月]

毎年7月からの2ヶ月間は暑くなるので、ホールでの設定音楽遊びを40分間で終え、その後プール遊びをすることにしている。そのように話すと、Eの母

親は、6月末で当障害児デイサービスの利用を中断すると言った。Eは昨年までの保育所のプール遊びの際、水着に着替えることへの抵抗があり、大暴れし、プール遊びをほとんど経験できなかったと言う。今年、当障害児デイサービスでも、そのような状態になるだろうというのがその理由であった。

加えて、市の事業である週1回の療育教室に、これから半年間参加することになり、当障害児デイサービスと並行利用は出来ない（と母親は理解している）ので、利用を辞める、ということであった。

突然の申し出に納得できなかった筆者は、設定音楽遊びに母子参加したことを、母親がどのように感じているのか、知りたいと思い母親に尋ねた。すると母親は「Eが一番大きいから他の子に迷惑になるのは仕方がない」「それでもEに自分で他の子に迷惑をかけていることを気づいてほしかった」と話された。

III期の考察③ [母親が中断を決めたことについての考察]

当障害児デイサービスの利用を中断するという決断は、Eの母親なりに考えた結果だろう。相談員が「母親がEを受け入れ付き合う最後のチャンス」と言って設定音楽遊びへの参加を勧めた経過を、筆者も重く受け止めてきた。しかし、結局よい成果を見ることはなく終わってしまった。母親の方から辞める理由を見つけて退かれたような印象も残る。

母子参加したことで、母親はさらにEの育てにくさに直面し、辛い思いをただけだったのだろうか。筆者は、母親が母子参加してよかったと思うことがほんの少しでもあるのではないかと考えた。母親に感想を聞いたのはそのためであった。それに対しての母親の応えは、Eの乱暴な行為によって母親が肩身の狭い思いをして辛かったというものだった。つまり母親の立場からの感想であった。それはやむをえないであろう。この時はEの意思は問われることなく、母親の意思で辞めることになってしまった。

去っていかれたことで、筆者ら保育者には虚しさだけが残った。

4. 全体的考察

約9ヶ月間、筆者ら保育者は共感を取り戻そうとすることの難しさに悩みながら保育実践を行ってきた。この悩みは、現在の状況のみならず、これから後には共感ができそうだという希望を見出しにくい状況であったことに起因する。このような時保育者は葛藤する。それでも保育者は子どもの言動を心の表現として読み取り関わろうと努め保育実践を続けるのだ。

他児達との遊びをするこの場で、Eも彼なりに感受していただろう。そして保育者はEと少しずつの関わりの積み重ねをしてきた。それは本当に小さな接点であり、ほんの少しの共感体験だった。筆者らはそこに希望を見出そうとしながら実践を続けた。一方、Eは心の痛みを様々な形で表した。Eのすることには彼なりの意味があるのであるが、緊迫感に満ちた状況になることもあった。そんな時、保育者はコンディションを整えなおしてそれを受け止めようと努める必要があった。その過程において保育における子ども理解の本質が浮かび上がってきた。つまり、保育における子ども理解は、どんな時でも子どもを理解しようとする構え、理解しようとする意志に基づく。そして複数の子ども達との継続進行中の保育状況の中で、一人ひとりの子どもの存在に積極的、肯定的な意味を見出そうとしていく、ということである。

Eと母親が去っていったことで、積極的、肯定的な意味を見出そうと努める保育の継続が途切れた。Eに向き合う保育者としての構えと意志を一旦鎮めた。しかし筆者の身体には、Eと関わろうとしたその身体感覚が残っている。子ども理解の本質はこの身体感覚として自覚される。目の前のこの子どもを理解したいと願い続け、理解しようとしたことに対する見返りは問わないということだろう。大切なのは保育の中で共に育ち合いたいと関わりあったことである。うまくいかなかった事例であったが、実践の意義があったと考える。

註

註1) 「○才児」は、4月1日現在での年齢であり、いわゆる「学年」を指す。E児は「3才児」であったが既に4才になっていた。この集団の中では最も年齢の高い参加児だった。

＜引用参考文献＞

- (1) O. F. ボルノー、小笠原道雄・田代尚弘共訳『理解するということ』以文社1978. p. 65
- (2) 堀智晴『保育実践研究の方法』川島書店2004. pp. 31-32
- (3) O. F. ボルノー、西村皓・森田孝訳『解釈学研究』玉川大学出版部1991. pp. 100-101
- (4) 津守真『新しく生きる』フレーベル社2009. p. 74
- (5) 青木久子『子ども理解とカウンセリングマインド』萌文書林2001. p. 41
- (6) 西村清和『電脳遊戯の少年少女たち』講談社現代新書1999. pp. 29-30
- (7) 中川香子『かごめかごめ論—「めぐること」の身体論1—』『聖和大学論集』23号1995. pp. 55-67. p. 57

〈参考〉

津守真『愛育の庭から—子どもと歩み学ぶ日々』愛育学園2009

〈付記〉

本稿はその一部を，和田幸子「わらべうたと障害児保育～共感を取り戻そうとした事例の考察～」『日本保育学会第64回大会発表要旨集2011』p. 231においてビデオ実践研究の部で発表している。

キーワード 保育実践研究 子ども理解 共感